

農業に懸ける情熱

【自然に選択していた農業への道】

妻の麻希さん、父の秀幸さん、母の和枝さんの4人で約34%の農地に水稲や小麦、大豆を栽培しています。

高校卒業後、アルバイトをしながら繁忙期に農業の手伝いをしていましたが、30歳の節目に本格的に農業の道へ進みました。現在は、連作障害により収量の減少を防ぐため、輪作体系や省力化につながる密苗育苗などに力を入れています。



【何事にも柔軟に対応できる力を身に付ける】

「幼い頃からとにかく機械が好きで、今でもトラクターに乗っている時間や、壊れた箇所があれば自分で部品を購入して修理をするときなど、機械に触れる時間を楽しんでいます。除雪や土木関係のアルバイトで重機を操縦することもありますが、いつもとは違う機械や仕事なので気分転換にもなっています」と話してくれた幸児さん。

「将来のことを考え、3年前に省力化を目的に密苗育苗を始めました。密苗育苗に切り替えてからは、育苗資材費の削減や苗の運搬時間の短縮、特に育苗ハウスの棟数が減り、管理作業が楽になったことが一番のメリットです」と手応えを感じており、農作業の省力化はさまざまな負担軽減につながるの、他の農産物についても省力化栽培を考えているそうです。

幸児さんは青年部に約18年間所属し、さまざまな出会いや学びがありました。「青年部に加入したことで、地元はもちろんのこと、自分の地区以外の盟友とも交流ができて仲間の輪が一気に広がり、農業に関する情報を幅広く共有できました」ともに時間を過ごした盟友とは、今でも会ったときには情報共有や他愛もない会話で盛り上がるなど、人とのつながりかけがえのないものだと感じているそうです。

最後に「農業は天候相手の仕事なので、激しく変化する天候への対応力が求められます。近年は特に天候の変化が著しく、作業のタイミングを見極めるのが難しいですが、品質の高い農産物を消費者に届けるために、何事にも柔軟に対応できる力を身に付けて農業を続けていきたいです」と農業に懸ける情熱を話してくれました。

岩見沢市西川町
松田 幸児 さん(47歳)